

## 地域のため、社会のために、大学ができること。

金城学院大学では、大学の研究・教育成果を社会に還元するため、企業や地域社会と連携した、さまざまなプロジェクトに取り組んでいます。今回はそのひとつ、名古屋市東谷山フルーツパークと生活環境学部(食環境栄養学科・環境デザイン学科)の取り組みをご紹介します。

### 食環境栄養学科の取り組み 「食」で、人と笑顔、地域をつなげる

#### 摘果を有効利用し、新しい価値を生み出す

東谷山フルーツパークは、梨やりんごなど15種類の果樹や、約100種類の熱帯・亜熱帯地方の果物を観察できる農業公園。同園と食環境栄養学科の連携が始まったのは2016年に遡ります。「きっかけは、フルーツパークさんから、摘果して廃棄されてしまう果実をなんとか活用できないか。消費者のフルーツ離れを食い止める良い方策はないか、というご相談があったこと」と、給食経営管理論ゼミを担当する丸山智己教授。摘果とは大きくて形のよい果実を得るために、実が小さいうちに間引いてしまう作業のことで、たとえば桃なら9割の実を摘果するそうです。

食品ロスの削減や食品リサイクルの推進がうたわれる中、

摘果の有効利用法の研究は学術的にも社会的にも意義がある。そう考えた食環境栄養学科では早速活動を開始しました。摘果フルーツがどんな料理にあうのか、どんな加工品が作れるのか等の課題に取り組み、その年の秋に開かれたフルーツパークのイベントに参加。ジャムやコンポートを用いたパンケーキ作りが体験できる「作って楽しむカフェメニュー」を企画・実施しました。この時使用したジャムやコンポートは、園田邦博ゼミ(食品学)と清水彩子ゼミ(調理学)が研究で取り組み、調理・加工したもので、素材は同ゼミの学生がフルーツパークで収穫した、摘果フルーツや落下したりんご。本来なら廃棄される果実を食用として有効利用し、地域の人々に広くアピールできたことが評価され、その後の継続的な連携事業につながっています。

#### 地域は活きた学び舎。 教室では得られない気づきがある

現在、フルーツパークとの連携事業のリーダーを務めるのは4年生の加納有葉さんと川原舞子さん。3年次から同園との連携事業



左から川原さん、加納さん、丸山教授。

に取り組んでいます。たとえば幼少期の食事の大切さを学ぶ食育講座では、フルーツパークで収穫した摘果りんごや摘果みかんで作ったジャムやシロップを使ったフルーツカッシュ作りを親子に体験してもらう企画を実施。レストハウスで提供するオリジナルメニューの開発では試作を繰り返し、毎月2種類、新メニューを提案。メニュー作りの際に、四季折々の果物を活かし、見た目の美しさはもとより、作り手の立場を考え、調理のしやすさにも心を配っています。「フルーツパークとの連携事業の企画・運営はすべて学生が担っています。教員は必要に応じて手助けするだけ。学生たち

が企業や自治体と対話を重ね、事業を進める過程で、管理栄養士として活躍するための課題解決力をどんどん身につけていきます」と丸山教授。「若い学生さんの視点や感性を当園の事業活動に反映することで、集客力の増加やサービスの質の向上につながっています。学生さんから良い刺激をいただき、厨房スタッフのモチベーションもアップしました」と、フルーツパークの川上清司さん(管理課 収益事業担当主査)からは、そんな嬉しいメッセージも。フルーツパークを学びのフィールドに、学生たちのチャレンジはこれからも続きます。



#### 春に採用された コラボメニュー

▶フルーツパーク・レモン園の開園を記念して考案した「チキンソテーレモンソース」。

▲初夏にぴったり「レモンパウンドケーキ」。

生地にもレモン、アイシングにもレモン汁を加えて、爽やかな仕上げに。

## 環境デザイン学科の取り組み — デザインの力で、地域を元気に

## 仲間とのチームワークで、レストハウスを改修

2019年2月、東谷山フルーツパークのレストハウスがリニューアルオープン。デザイン提案をしたのは、環境デザイン学科の特別プロジェクトチーム。その取り組みは地元の新聞やテレビにも取り上げられ、話題を呼びました。

フルーツパークと環境デザイン学科の連携は2017年4月、同園の集客増に向けた企画プレゼンからスタートしました。プレゼンにあたっては、まずは現地を見学・調査し、学生たちの目線で、良いところ、改善すべき点を洗い出し、そこから得た気づきやキーワードをもとにアイデアを交換。その中から「おしゃピク(おしゃれなピクニック)」「温室での探検ツアー」など、いくつかの楽しい企画が生まれました。その後も、温室

果樹園の集客力を高めるための学習帳作成や、木酢液のボトルデザインのワークショップ開催など、複数のプロジェクトが同時進行。2018年春に立ち上がったレストハ



学生たちが描いたボードを背に改修チームの皆さん。

ウス改修もそうした活動のひとつで、メンバーは大村穂菜美さん、岡本海希さん、神戸千穂さん、野田有紗さん、眞金遙さん、牧野芽衣さんの6名(当時3年生)。指導教員としてチームを率いるのは弓立順子教授です。

各分野のプロと手を携え、  
地域の新たな魅力を創造・発信

木の風合いが周囲の緑とよく合います。

デザインについては、当初はスタイリッシュなデザインと、カラフルなデザインの2案を提案。そこから「フルーツパークらしさ」という視点でデザインを絞りこみ、最終的に自然の落ち着きと果実に親しみを感じられるデザインに決定しました。デザインが決まれば、次は施工。しかし、学生だけでは施工

ができません。「学生の提案したデザインを理解し、さらに適切なアドバイスをいただくため、株式会社スペースには産学連携の一員として参加いただきました。特に使用済みのりんご箱を積み重ねるという案に対しては安全性を最優先に、ケガが起こらないよう、細かな調整をして

入口も細やかに演出。



りんご箱を積み重ねた壁面。



園内で集めた木の実や小枝で作った小物たち。ロゴマークも学生たちの作品。



いただきました」と弓立教授。そんなプロの仕事の間近で体感できたことは、学生たちにとっても大きな収穫でした。

「特別プロジェクトチームは環境デザイン学科の有志学生の集まり。ゼミでも、授業でもないのに、単位はもらえないし、成績にも影響しません。もちろん、お金ももらえません。それでも学生たちは頑張っています。教員は必要な時に手を貸すだけで、すべて学生に任せています」(弓立教授)

一方、学生にとっては、自分たちのデザインがカタチになる喜びはもちろん、それ以上に、自らのキャリア形成に役立ったことが大きいと言います。産学連携という貴重な「場」を提供してくださったフルーツパークからは、今年のGWのレストハウス利用者が昨年の2.4倍を記録したという嬉しい報告も。デザインの力を改めて感じ、大きな成果とともに終了した改修プロジェクト。特別プロジェクトでは3年生による「名古屋YWCAビルのレストラン改修」という次なる挑戦がすでに始まっています。学生たちのさらなる活躍に期待しましょう。

## 音楽に、歌に、国境はない

～クロアチア&ボスニア・ヘルツェゴビナ演奏旅行を終えて～

(金城学院中高グリークラブ 2019.3.20～3.30)

### 金城生みんなと分かち合いたい 演奏旅行で受けとった、たくさんの愛

130年前、ランドルフが未知の国、日本に来て蒔いてくれた愛の種。今度は私たちが未知の国で新しい種を蒔き、花を咲かせたい――。

そんな思いで東欧での演奏旅行に飛び立ったグリークラブ。メンバーは宗教主事の沖崎学先生を団長に、金城生(中・高)46名。愛をプレゼントするつもりで臨んだ演奏旅行でしたが、行く先々で温かく迎えられ、たくさんの愛をもらって帰国しました。「この演奏旅行での出会いと経験を金城生みんなと分かち合いたい」。そう感じたメンバーは、この春の伝道週間で、全校生にプレゼンテーションを行いました。プレゼン用の資料や映像づくりは高校3年生のメンバーが担当。訪問先でのエピソードを写真と動画、音楽で綴った『NO MUSIC NO LIFE』は大きな感動と共感を呼びました。

### あらためて気づいた、平和の大切さ

今回の演奏旅行ではクロアチアとボスニア・ヘルツェゴビナ、2つの国のそれぞれの高校を訪ね、その生徒たちとジョイントコンサートを行いました。思い出はいくつもありますが、



全校生徒が大きな拍手と歓声で迎え入れてくれました。

中でも金城生と分かち合いたいエピソードが3つあります。1つ目は、クロアチアのセスヴェテ高校で受けたおもてなし。生徒たちは一行が到着した

空港にサプライズで迎えてくれたばかりか、翌日は500人を超える全校生徒が学校の玄関ホールに集まり、メンバーを歓迎。最終日のステージでは

『花は咲く』を一緒に歌い、心と心が結び合う瞬間を感じました。2つ目は今から8年前、東日本大震災が起きたときのこと。その日、クロアチアでは若者たち5,000人が政権交代を求めデモ行進をしていました。でも、若者たちは日本大使館の前で行進を止め、被災者のために祈ってくれたのです。その事実を初めて知り、深い感動を覚えました。そして3つ目は平和への思い。今回訪れた2つの国は1995年まで激しい紛争と内戦を繰り返していました。街を歩けばそこかしこに銃撃の跡が残る建物や廃屋。サラエボの墓地公園には数えきれないほどの紛争犠牲者のお墓。悲しい歴史の現実に胸が締め付けられ、平和の尊さをあらためて感じました。

愛と感謝でいっぱい11日間を経験した今、思うことは、「もっと世界に目を向け、周りのみんな、さらには世界の人に愛を届けられる人になりたい」ということ。春の伝道週間でのプレゼンで、その思いはさらに深く、強くなりました。



プレゼンの企画・制作・ナレーションを担当した高校3年生のメンバー(手にしているのは訪問先でいただいたプレゼント)

## 2018年度卒業生進路状況

今年度の金城学院高等学校から金城学院大学への進学者数は、内部推薦者169名に一般推薦・受験での進学者11名を加えて計180名(卒業生全体の57%)となり、内部推薦では多くの生徒が第一希望の学科に進学することができました。また、「協定校推薦制度」を利用し、

関西学院大学へは10名、同志社女子大学へは2名の生徒が進学しました。外部推薦では国公立大学合格者が名古屋大学1名、大阪大学1名、名古屋市立大学(医)1名など合計8名となりました。一般受験では、早稲田大学1名をはじめ、慶応義塾大学1名、国際基督教大学2名、上智大学2名、東京理科大学2名、青山学院大学5名、明治



## ソニー教育財団 2018年度ソニー教育支援プログラム 優秀園受賞

### 探究心を刺激する「可塑性のある園庭」と、 その育ちを支える「園庭ワーク」

園が整える環境には、その園が大事にしている保育のねらいや、「こんな子ども達に育てほしい」という願いが込められています。本園では、たっぷりの時間、空間の中で子ども達が主体的に遊ぶことを大事にしてきました。

園舎改築に際しても何度も勉強会を重ね、園庭を「可塑性のある構造」、つまり「子ども達の遊びにあわせて変化できる園庭」として設計、再構築してきました。園庭としては珍しい築山や斜面があり、起伏に富んでいます。築山の中にはトンネルがあり秘密めいた場所になっています。粘土、海砂、川砂など所々変えているので、子ども達は「この土は泥団子、あちはサラ砂」と使い分けたりしています。果樹も多く植えられ収穫を楽しんでいます。遊具は既成のものではなく工房の方々と作ったオリジナルのもの。ブランコ一つとっても、様々な乗り方ができるように工夫されています。ここで、子ども達は

毎日心ゆくまで、とことん遊び、探究し、育ちあっています。この豊かな園庭を、子ども達の心を刺激し続ける状態に保つのは、年4回、保護者、卒園生、地域の方々と実施している「園庭ワーク」です。園庭のメンテナンスをみんなでしながらお互いの絆を深め、子ども達の遊びを支えています。

1999年に現在の園庭の原型が完成して以来20年。子ども達の遊びを刺激してきた「可塑性のある園庭」と、その園庭を守ってきた「園庭ワーク」の活動は、2018年度ソニー教育支援プログラムにて全国146園の中から「優秀園」を受賞しました。(受賞論文はソニー幼児教育プログラムHPにて公開中)



園庭ワークでは園庭の修復や、子ども達の遊びのための仕掛け作り(夏のウォータースライダー設置など)を行っています。



ベルトやロープで作った  
2種類の手作りブランコ!

### 『おなか乗りだよ!』

既成品とは違い、前後だけでなく、子ども達の動きにあわせてあちこちに動きます。「よーい、どん!」で子ども達は走って飛び乗り、おなかで揺らし、「おなか乗りだよ!」と得意顔。乗りこなすには体幹の強さ、バランス感覚も必要です。



### 『もっと流してみよう!』

少しでも気温が上がると雨どいを出してきて水や土を流してみます。「あれ、流れないぞ」「もっと流してみよう」。真剣な顔で雨どいの角度を変えたり、水量を変えてみたり。まさに「遊びは学び」。「水は高いところから低いところに流れる」という理屈を知らなくても、子ども達は遊びを通して身体で学んでいくのです。

「ふしぎだな」  
「どうして?」がいっぱい  
生まれ、子ども達の探究心を  
刺激する「可塑性のある園庭」  
をこれからも大事にしてい  
たいと思っています。

大学1名、立教大学6名、中央大学6名、南山大学40名、同志社大学10名、立命館大学14名などの合格者を出すことができました。また、今年度は医学部医学科の合格者が例年より多く、2018年度卒業生で延べ6名(現・浪あわせて延べ21名)でした。卒業生の今後のご活躍をお祈りしています。

(進学者実数)

| 国公立大 | 私立大 | 金城学院大学 | 国立短期大学 | 私立短期大学 | 専修・各種学校 | 就職 | 進学準備 | その他<br>(海外留学など) | 卒業生総数 |
|------|-----|--------|--------|--------|---------|----|------|-----------------|-------|
| 8    | 106 | 180    | 0      | 4      | 3       | 0  | 12   | 1               | 314   |